俳諧月雪花

四

へ遠13
460
4

門へ達13
號460
巻4

縁結月下菊下の巻

柳亭種彦著

五　早い染て妻模様

其次の朝清十郎又偽を工風して菊おむらに但馬屋の
母様ゑ事紙をあげしかとそれとなくこまかに事をうれ
その間ゑ清十郎を呼のぐてもくべたりのぐまぐ四五日ゑ
そのうちゑ留おきそのうちれといひてきれとうらうれがさ
ゑら金澤へたゑ連ゑきそ作兵様ゑ五七の人とせてきたてられ

又例の口あまりせこれハ膳魚が大腹をふくらし鱠をこそ
今あさるべ喰つるまんその怒りをるごめてかごとおどしつ
一日二日ところふまくごひお菓も居るすごく原来夫とさごまひ
人とあり人びんのおれど深切ふいこまろてくれるごうもとくくうく
六日だろうもぎこしがある時ふたるごの勘七あこ〻びく〻
なぐり「且那さるおふくろ振ガアレヤふいごるさろてござるまも
うけあるれがなのお方ハお菓振ごあも外〻情縁後もござろこ
さうそれでハごうも一晩もそあヤレてハ濕ません私よかくし

るされてなんまろうるなるられろこ今こあつてヤこみのいとかごト
りようちふあきあ引うれごまやの母ハ「ヨヤあろうんあるこふくト
ふろうあごうるお菓あろうちえこそ「ヨうあまんあど世の中みこまうりの
るあげうヨ清十郎ハここふひこあれうつちまりう「あうあまんあど世の中みこまうりの
つけこうぐまろを母ハつれぐうちまりう「モシ喜助さんあるこふ
とりあうるろよ「ごんくおそれらうまうこ「モシ喜助さんあるこふ
どこで私の母ハおなひるこれまうこ「母ハおとろわア兄さんごよ「ヨヤ
いろる「母おまんのこるいるハるい今度のるハうんる兄さんがこるい
のごぞんふ且那振ガこうあうまやろこっけまるこハあぜあらぶ
こころの兄さんごのヤ「あいこんごの斗ろどなる者をうこまんて

ぎまろくるくるとぶつかるそこへけ百八文里さんえんどらいがなれへぶれが名ぐ清十郎くときろくといろろせへそれぐるくるきをあらうが馬鹿ふまるとあらまやろさふ違ひるいそやアわう私のいかさいまぐふちろをもきのてられるへいお菊がえあいといってえんえんがさらぐかぶうちやろてあけくくと口ぐあだうり去てあいさん金さふやうと飛ばさところがごろやアあまへんの細工ごと私い知ってあるかさ〳〵モシあろうさんさとしの出まくとあくくまるとこの所へさうあうまやろて〳〵それが

えんふ偽ぐよ〳〵ぐういくませうの〳〵今見へ代名さんの居おうをまてたらうさんざがるらうとあるとあくくぐちんまろいろんるるがあるくて。勧七お菓をつ和えんるや〳〵イちとおぬるうぐぐろませう。

ろ〳〵今サ私るお菊様とうみるのまろうまりて実ふびろうらいとまりさ序勧進ぐ濕まりてあるいろるさるそのやさきへ〳〵その勧進ぐかうぐらう峠うへまとふとあるとうのあれぐ所うぐへをうとて我身るぐう幸抱ぐぐうもまぐぐれるぐげぎるぬせあてあう二三年如代ってあいてられろとさぞそんるぐんとうふとえおろうさんの

ほ念紀とあぢ〳〵めて琵琶橋の角の地面をのうて所ときつと
紙ぐるみ遣ひたまへ。お表様をかくせて上るぶの代且那の
私の所ゑ〳〵まつ〳〵ちく〳〵丁度蔵番爺ゑ一ぱいのぶ後出真の
まつ〳〵様で。おつうさんのうとれぎろでござるまをうぞうぞ
是をと百両包を給ふらさのやるゑかがるロでもさぞあつまを
る紙いつぞらうのお蔵るざアるのるくいれてもまれてまつろ
さらう。私もかうひ色男をるげうく囲つてあつこのぞるえの
る金入袋をとらさ。余所でハ家のこあをおのうてゑを動学〳〵と

あくられどまぐ内へあく方が私のハ世居ごとくるの居こい川
ても内へられるいまで家出紙まくあそもまをえるる
るぞでハあのとたら紙くうて引負をとる氣づひのるいよ紙余
私をまくあくつのぐらうが居金ぐそうもくぐ出てハのう勤
つぐるるハなの通りの口まくぐうれ世の者もろうと且那
さまハいつあくりるされまとこさのまくぞるそとろ〳〵間の
事をあぐれがのふう勘当さくくえる筒抜居勘定がよあつ
祝義をうと母と去年も今年も僅是。お表それあろくくも

付るへすぐあまくの身うけふらくこ時へさやうその時晩
旦那様のおいでるをとろくこその時あ大変知れらくーまーくへイ
おゑが身うけふなるくこ様ガ母ヨヤ勇七へちくぎろくへるのふその晩の
るへ内あ丁ーませんへ母ぞえる丹様ガ私へそろとあつちやるあへ
清千郎へ此頃毎晩内ふあるいやうとぐらいつを寮へ連くく
まくを完ガりてあくく方ガ安い為ふ付ぐらうと継死あうけ合ろく
かふおくくさんの所へ逢ふらくをあまくさへ承知ふ今夜とぐ
あも連ていくうガちくくせん内へへ直されを今ふ様でもうぐを不

邪魔でもさるをでへ世話へるうなぐらふをぐとおちつて
いくれば私の身のうへなるふおまうせヤこまをとこの安ノ
あとのくあきる衣へそれかふなるくこガ内絶へ掛合ふおいるをとろて
年季へ僅てなくくこれど借金ガぐんとあくて死さらをッと
皆ふ拂ひなんふお金のいきるひへおそろくいのご時だろうふ
ぐくくとかこガついそる葬衣負まへいろぐをお味をとろくを其
時ふ私へぐうもらひふくて三ッだろう除くそれをそへ
ふけてあるあんふまろまへふるて眉毛へ似あふまつと剃刀と

但馬屋後家
助七

そりを見せてさぐみ剃てくださるそれを安く出しますならば一ト剃ぞり
こそりとおちる片々の此眉毛が三色余ほどもつゞいてあるならそれが
それや宝る直なのさまでもぞんじませぬがしてきませぬ
まづお客はお久しいもんしをあげまして其なくの眉毛でありまして
久しくござりますもと商ひのでござりますがお継合に〆ヤおまへさまにお訪に
おきゝやれどのまア後をお聞のその昨晩旦那様が茶屋へお出
なさろくこところが口ぞめがしてかくいふ何ともいふ
客さまへさうやつてと知らせずさてからわたしのそれからおかへ

いくどいくど小袖を着かへてそのなア中年のご商がひさしくなさせなどして
きらゆうとされたるてたつて二人りで茶屋の縁さへとそうとおいて
旦那様のお後から縁へまゐつてかゝる身をつゐてあるなこうと
おまさ紙をくさ何人連来さと思ひなさつて持ておいでの直
を下におゐて一寸とまあ待なされまして手やるまいかが
しくのごとありさまるとそれからさんなが扇子の片
いつて一下さるぎ錦屋からも大せいきてお
ましいなどなるから鉢を並べて出さ

もちろんおふくろ様のまごおもちろさもあれません（勘七そこ
まごでいらかくごのそれから深沢の寮へおくとまごまを年も
さろやたくぬかさろぢとまつうど今まで彩遊をさろて
あぎやうおもくるる者が四人ぢろの男女でいさぞ淋しくろて
るるまいとお衣がまくて乳のぞくでぞうもとる乳ごとあぎあを
さのんでなれおぬのせくらうなのいそづうの接拶あれでも拵里
おるるうちへなの客をび制てやろてかうきそとろあるくくろ
面白いるもなくこが何ぬくくてまたいくでんを迫るもえるる

るい内（巣おいるまくでるるれぞんといるるい物ざおふくろへあれる
ぢをを連さまそぞうもとる膳ぞうぶれて猿もてきぞとろ
ちくかうぢけさが中がうくてそれい安靖これでいぞうう
おうこさんの右おうぬ縁てさかうぶが年増で大きふどき
げんをまくぞうさかう彩造で乳おいるの狐拵せうと親著
さるくまるらうが薬除猿の縁見いうがあれおざうとあん
でそれうう馬森ア為彩紙て通りの娘をきうろくと見て
おるいても芝いとおぬ隙ぞうたのもさそくるいめ金たが

あまり〳〵不吟味〳〵なるぐらいのぐそや芝居の陳列場不加賀屋の
娘がきてゐるゝがふと私が目に付て一目ぢろ〳〵見てゐるゝぶちろと
それをたゞで色も余り白くもないがいきゝる新しい懐子〳〵
ぐらゝまゝ人の気ふいらゝと思ひ〳〵菓屋で所を皆せて
おいてさうでもない出帰りうと皆〳〵ぶ新家のやうとそれで
お前と取かゝるお供を極めてうら白歯でもらって振ひといふ
粧ふまでもかゝるぞ。やはり浅黄をつけさせて付まうて〳〵といふ
風ぶ気ふいらゝうと懐熱をまでゐるのに付のろ〳〵ぐるぐるの

世ゝで面白くもないあんるのの紙。今のうちるゝ人〳〵知らぬ早く
そゝとかゝしてもまひる一端絹束もさのの紙やらるのいれば義
理が欠る。あれを真ん内〳〵あく〳〵と私もまゞ老持さかゞとらふ
でもないゝふのそれゞから他ゝいなれ好ゝ紙ゝびえゝ自由
ふるるぬまゝ人の子をなぞがゝてあいさあるえんのと毛非〳〵
ぶるトふふ動せ〳〵あゝ〳〵ろ振ぶゝつけるぶぶそれいなあゝ
床僻でゞぶゝませゝ人ふゝそれぞゝしてあるゝ人振ぶ
振ぶもさゝませゝ〳〵そんるゝびまァそれいいそ母 みゝ

ところが又旦那の持病がおこつて出かけさ時ふお菊でハ私ゴロゴ
ゴ〜ふくい他うゝ来さ嫌でこるの法ろ奴事がなると私が側
かゝ寄裏をつけてそれでいろのぬと是見そられとあゝりれ粧
かぶ〜せて遊んでゐるそのさきハ私ゴ運てあ〜うけるさうりふ時ふ
なのふぶごとめげさうもるくてるの「モシ〜それハあるのるの
且那孫も呂今かゝ〜とハあろもやりあゝうどぐりませう」「母家
例の狼さんゴ。お菊るぜゴ〜くと法てあのぐごおまゝいちろさも吐ふ
ちるふハ金さゴうかりお菊ゴ来ゴ来ゴ〜さを種ゴ〜く

幸助でごぐりまちとごま〜ふ遠ひあるまのそれさもお菊で
ふハるふゴまぐ結納をもうけぬ前指せまのとのひハちるハまア
一旦でもニでもひぢやうをたてくるぬ。ヨヨ。トハくどさんのあらぐれば「動れ
七ちうハお仏母さとハ私ゴお二人りさまのお箱のうちハちうくうと
うけあちうておきさませうぐ今日ハぐうぐお帰りぬさうて動七
さんおまゝハお供を「お見世まぐハのゴられぬゴ途中まぐお送り
まうさう「母そんるうお衣まうせておくよかゝりませう」トニ階のもしどあり
かくのそ。モシおまゝ刀切で出頃療仲おうひぐさうぐるあとこハ

松が鄰ふつゝ車海老がゝ取るの叶どろふ行ゝふの居地色
〳〵とかゝ面く清十「金天ゞ巻もれく〳〵とまでイヤとこまかゝ
りつ作けゝさお長時代ちゞひでおらゝ仙女を見こ事ハさんと
るのゞ山谷猫とりゝ正本狐りつぞや積ゞそめるゝふ仙女ちや
屋り役ふてとてゝりゞきをゝこせゝふゞさんと今のあんぞゞご
あんる役者でゝつこゝ初ゝん顔の牡ふゝゞつゝこゝ挽ぞゝ
乾ゞるくて後表ふゝゞ一枚板で取りのゞかゝ見こゝゝ
余程むゞゝかゝこゝゝゝ悪ゝの塗ゝゝ出こ園掘で

悪ゝのうちふゞろゝ花ゞちゞくゝ見える。それゝそれとお菊ゞてふ居る
の狐ぞゝゝて初ゝこゝゝ「そゝそれハ今お茶薬湯の薬をまゞゝれ
紙ゝうちふゝのおゝを連まゝしていゝこ時ふ向ふから「そゝゝく兵衛
ゞ本こゝとゝゝたゝゝこを忘れこゝのゝゞるゝゝやゝゝゝくゝ考べる
やゝこ「おまくふ似てこゝとゝゝふゞゝゝゝそれゝゝくゞあゝこゝこくゝ
の返ふゝぞゝゝゝのゞ「お菊を女房ふゝゞこゝるゝゝ勘当を
ゝるこれませゝとれからハゝまゝとそれぞゝて車浙ゞ
「そゝるゝべゝのおゝを一日でも二日でも「かくこゝゝくそれハ

おまぶ親ごのヨやちぢり備いごい上ようろうかくさと扶
父様の元の完へそろくりたあるぞそれ指もされまの「とちらい
それで掃りとうて。モシお菊さるゴアまもおあのゆうあるまるせぬ
さアお部をおあげるさろてきろろうへんどかおつろやりまう
「ろうまでいおあのさるとのあるのぞんじませご変助様ごと私の母つ
て「あまりおこえがちのさくてごろもうく吹されませんぞ。ぞ「へ「お
あのの孫でもこのたちぶそれもかちろとあるるうらひろつふとろぶ
うのとうんるがあんまやろさをぜんこのあんるおまこのあくこげ

内ふおいでるさろかんもえくらぬところへ回けとうあろうさんの
あんまりるおお出ろとちんこまと事助さまるもおあのさる
マこもまぶ義ふもまらぬやうち湯をくさ私の計へ根私ろう
お落ーるさろこよ扇がトろりいぶーそれをちぶふ歌ふのとあるん
「のうくそれでるろうまうこ「オイー舞衣さんく「ヨヤのやぶる
るんぶく「付まりしてるるあらうんがあんまりお年がのられく
かぶ縫新造も骨がをれるる「まれぞろぢやア稲くく
ろうふあのるかりておるるくく「あつてうせるるあくのやうる

昔へだくまん今どもアゆとうまくあぐれるあきぶまと内
なる方が好みあるうと「イヤこれハ仮接拶
○かぐや姫のお夏さまと頂彼但るを人へ約束せしを那ぞうり
姫といふもちろり我殺生のを引こうり今更まぢハ結納をのを
おきあそれと人を形こそ父ふきこえぐうのくとうとろれば
ゆうく砂糖も幸助と娘がひそふかこうひしをを
ぐきそつしど思ふ仮るを人ろうまぐ結納をも信ぐれば
裏貧ハ安きふそれど紙布を脱ふやうろうたれば

深もちろうん儀せもちろうんをを人今更新ろをゆうをん
と仏ふ懐熱お夏ハるをさう日ふまりて懐姫の著明が苦し
ろ丑ぐもいろ日より白地ふ咲えぐうさまぐふ薬ぜしう
慾金の塔のはてふ砂糖屋の妹ひとりのりその伯母ふひまぐ
かぐりそれより父ふいそせんふちくとうをとをさる彼亜
徒引ふれかしと幸助ふかくひろをぐこれもふふ道ろを
幸とおりんど絵方ふももとりふ巳つまり教所るく彼ふ
ちさぐひお夏ふ我羽織をうちまぜこう度ろうぶ菅笠をて

顔形かくしたる人目ばかりの男姿ふるくつくろひ夕暮の
さびしきふる屋敷口よりまぎれ出て藤舎へとそ急ぎける

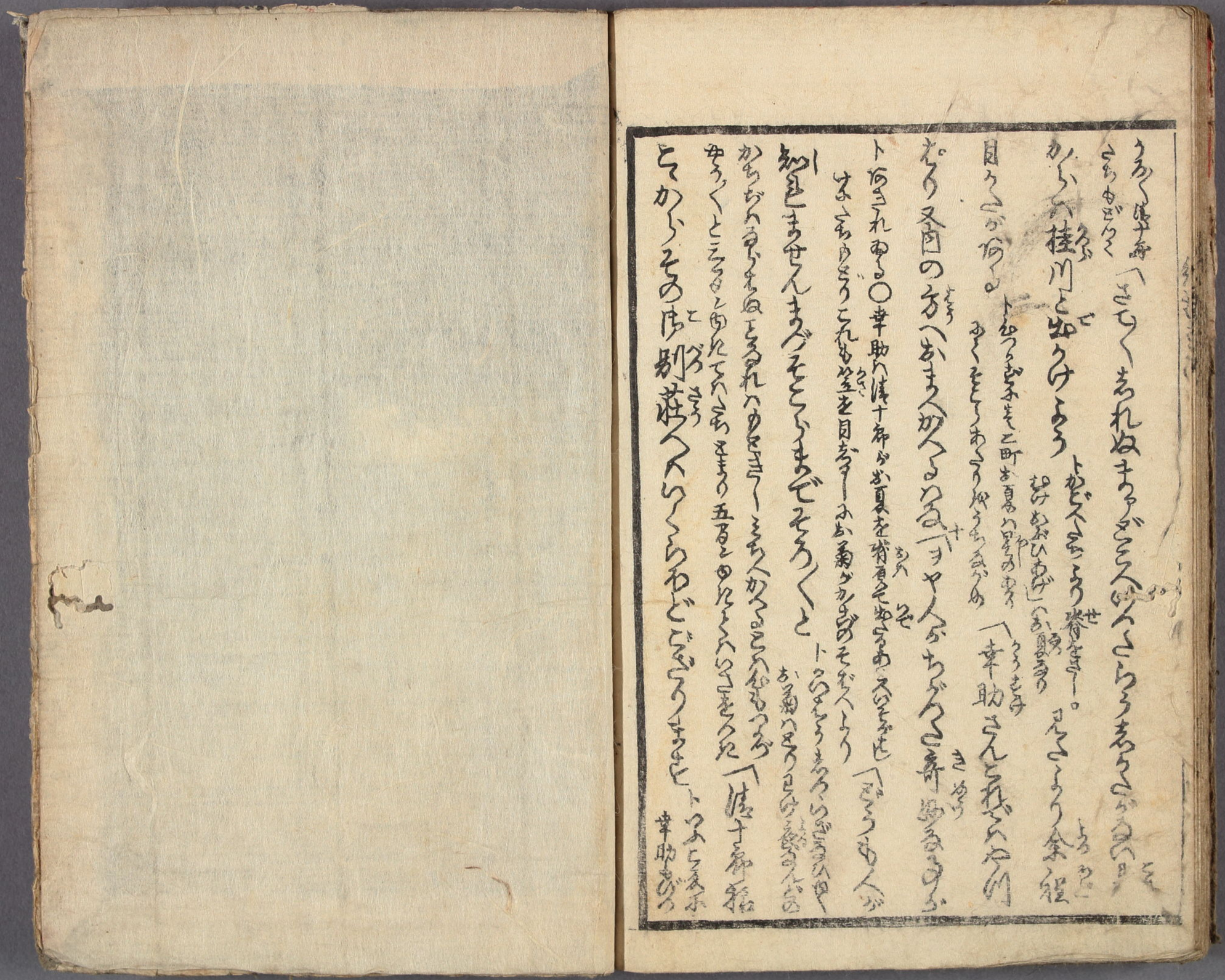
（六）見入の外なる戈目

清十郎は母のかくしなをあそぶ為をいひるぐさの撥遣を
とりてゆさりしぶ心のうちふかうかくそなふべ明日は
うるふとお菊をりど母の催足あんそれもうるさく動
七ぶ帰らぬさるふめづらしく敵落をしてるんと思ひ金
澤の力切の我別莊へ景色よく夜るんどは海老を寿

此の見えてゐるさりしいざりろさりふ連ざんとまめけるが
物ふかとかたりて何事もお菊はいらぬが使ふるりこのかくもと
呑へられがらひ合さるど見も又娘姿は目ざんと動七が旅
なきるひのをりふ見ひしく風合稽菩薩をふづくびどる菊ふ
ふるとれがをとがり「られはまプ不思体る仕主ひの雪ととろづが
ぢざりません」「イヤ紙雛の奥様のやうふ見えてくく仏ぬ
トこれは家内の者あんうれど考を「ヨヤけしからぬあるりがまつて
待てもちりれれおきるふいぶろう」
ぶらんかいぢるされまると「今ッから私中ふ身をるげくろう。

自害ふせうとうまく勿七が帰るとのこれをきく撰てあらしの落葉
草へ菜花をつけて晩月まで不百遠ゐく仕ふ所いつのこと
てられ四月ちく稽ゲあり何と低下へ二すごとざァおゆ「ハイ
十八ハイ」ぢゃァ日ろいァイーといひるそれチャンと浮陽へ「ヒカヒヘト
ちちふまろせてさまぐのこと所いひくまぐさあてたや初夜「ちちろうんぢきふ
ひふあさひるの切通しまぐきちりーげおゆいくまりかーとまり
そこりとぞんぢまりて表つけでまりまりさろもろく鼻徒ぐで
見がいくてあるうれません「十五鼻徒ぐお見を食ろれふちんる
遠道をつりぞあるいさるいあるまいそてあやまく量て

晴ー トあろう所をとて あちこちうろ歩り イヤ天の助け菜屋へかろうちまろくこがアレ
駕籠がある。駕籠かきへごけくいろくろちくこあるこの酒屋ざ
らうぢきふいろて呼でくるかふまァ〜のろてあるがいくトらぐあの
おきくをのせ笠八目おるーちゃうーどうーかぶのせひろくけてあるさあるへ「夏振
あぶろあく口をりあとそあれこるとろろお夏をらぐるひきかくる半助
ぐろぶお見ゲ痛くまるまろ板あれく駕籠がどざりまとめて
おりてるされまー トもろうろお菊がのろくるかぶの陣の菜屋の。二町ぢろり
あまるひあるとられもあるーくの世てかり
あるとふこそ〜人ゲ集てありまーくがかどくきもあのるくふ
ちぐひんどぐりません手とんでまありまをトあるきーくくく
ひろくをあるく

面會

朝比奈の切通シ
幸助
清十郎初代